ISSN 2186-5647



5-26

# 槇文彦建築作品における「交流の場」に関する一考察

日大生産工(院)　○渡邉　純平　　日大生産工　古田　莉香子
日大生産工　広田　直行

## 1.はじめに

### 1-1.研究の背景と目的

近年，地方の過疎化やオンライン化の進行による地域コミュニティの希薄化が問題となっている．そのような中，社会的なコミュニケーションの場である公共施設における交流の場は生活の質を高め，地域住民間の結びつきを強める場として機能している．このような諸問題への対策として，交流の場を研究することは，地域のコミュニティ醸成に寄与するという点で意義があると考える．

そこで本研究では，槇文彦氏によって提唱された群造形[注1)]に着目する．群造形では，建物が群をなすことで一つの集合体を形成するため，建物間には建物がない場所，オープンスペース[注2)]が生まれる．これらのオープンスペースは多用途であり，様々なアクティビティを許容する交流の場として，地域コミュニティの発展に寄与する．

以上のことから，槇文彦の設計思想とその建築的な展開を明らかにし，群造形という建築形態の交流の場としての可能性を考察することで，コミュニティの創出を促す公共施設計画の一助となることを本稿の目的とする．

### 1-2.群造形をなす建築における交流の場

都市と建築，建築と人間は切り離せない関係にある．槇は建築と都市との関係に着目し，都市の原理を建築へと取り入れるため，集合体の研究を行っている．その中で都市は古いものが新しいものに更新されるといった無数の変化によって生成されるものとし，それらの各要素を繋ぐ接続空間としてのオープンスペースに指針を必要とした．この考えはヒューマンスケールの細かなディティール，空間構成によって都市・建築・人のつながりを生む槇の建築作品に強く現れている．中でも群造形をなす施設では複数のオープンスペースは地域住民が集うことのできるパブリックな空間として機能している．以上のことから，計画面の段階的開発および機能，空間構成の面からは交流の場という視点で考察を行い，群造形をなす建築の交流の場としての可能性を示す．

## 2.研究の方法

### 2-1.方法と対象施設

本稿では，槇の群造形の特徴が顕著に現れている作品として，代官山ヒルサイドテラス（以下「ヒルサイドテラス」とする）を研究の対象とする．分析は図面を元にした文献調査と槇自身によって書かれた書籍から槇の言説を参照することで，群造形の設計意図を分析する．そして，その建築思想を明らかにし，群造形におけるオープンスペースの公共性について，計画面，空間構成という2軸から交流の場としての可能性を考察する．対象施設の建物配置および施設概要については以下，図１および表１の通りである．

### 2-2.既往研究との関連

既往研究として，『槇文彦の建築作品における「パブリックスペース」の構成に関する研究』（2021年）[参1)]，『槇文彦建築作品における群造形について　～慶應義塾大学の2つの図書館をめぐって～』（2021年）[参2)]，『透過空間層からみる代官山ヒルサイドテラスの空間構成～空間の奥性の可視化・数値化～』（2022年）[参3)]が挙げられるが，槇の建築作品を交流の場という視点で調査した研究はない．

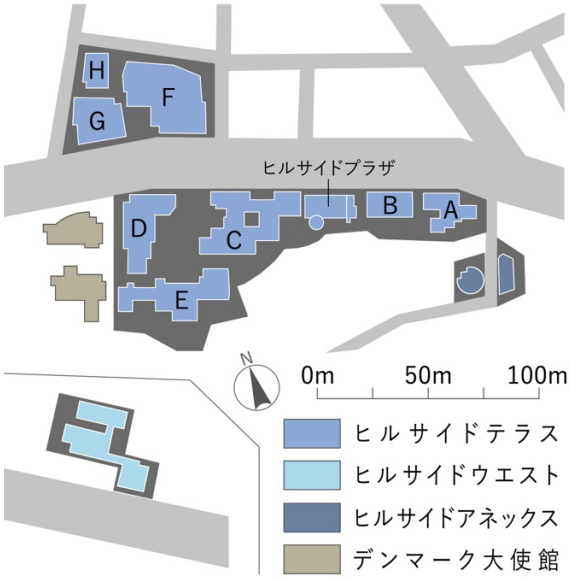


図１　代官山ヒルサイドテラス　建物配置

A Study on "Places of Exchange" in Fumihiko Maki's Architectural Works

Junpei WATANABE, Rikako FURUTA and Naoyuki HIROTA

表１　代官山ヒルサイドテラス　施設概要

| 段階 | 竣工年 | 施設名称 | 敷地面積（㎡） | 建築面積（㎡） | 延床面積（㎡） | 階数（階） | 高さ（m） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第1期 | 1969 | A棟 | 7,167.7 | 642.8 | 1,849.1 | 地下1/地上3 | 10 |
| | | B棟 | | | | | 9.97 |
| 第2期 | 1973 | C棟 | | 764.1 | 2,436.1 | 地下1/地上3 | 10 |
| 第3期 | 1977 | D棟 | 7,319.8 | 1,274.7 | 5,105.2 | 地下2/地上3 | 11.5 |
| | | E棟 | | | | | 10.6 |
| 第4期 | 1979 | デンマーク大使館 | 1,971.9 | 766.2 | 1,896.3 | 事務棟 地下1/地上3 | 事務棟 9.9 |
| | | | | | | 公邸 地下1/地上2 | 公邸 8.2 |
| | 1985 | ヒルサイドアネックス | A棟 280.0 B棟 157.5 | A棟 151.5 B棟 102.8 | A棟 276.9 B棟 311.4 | A棟 地上3 B棟 地上3 | A棟 8.85 B棟 9.19 |
| 第5期 | 1987 | ヒルサイドプラザ | 7,319.8 | 88.0 | 574.0 | 地下2/地上2 | 6.8 |
| 第6期 | 1992 | F棟 | 1,978.9 | 1,361.9 | 5,140.3 | 地下1/地上5 | 19.5 |
| | | G棟 | 993.5 | 666.3 | 2,726.9 | 地下2/地上4 | 14 |
| | | H棟 | 331.7 | 207.2 | 496.6 | 地下1/地上3 | 9.9 |
| 第7期 | 1998 | ヒルサイドウエスト | 1,230.2 | 706.0 | 2,957.5 | 地下2/地上5 | 18.23 |

## 3.ヒルサイドテラスの計画からみる交流の場

### 3-1.群造形における段階的開発

槇は「オープンスペースはコミュニティの核となり得る」[参4)]と語る．1967年から継続的な建設が進められたヒルサイドテラスは，渋谷区と目黒区の区境に沿って延びる店舗，オフィス，集合住宅などの集合体である．スローアーキテクチャー[参5)]と呼ばれるヒルサイドテラスでは，段階的に開発がなされたため，建築が群造形としての公共性を持つプロセス段階においてもコミュニティが醸成されている．事例として，開発の過程で住民，労働者，プロジェクトのオーナーを中心に集まりが形成され，それが現在の「代官山ステキな街づくり協議会」の発端になっている．現在の会員数は100名を超え，ヒルサイドテラスから離れた場所に住む人々も参加をしている．会の目的は敷地前の旧山手通り，八幡通りそしてその周縁も含めたまちの姿をよりよくしたいというもので，具体的な活動内容は以下，表2に示す通りである．

群造形では，スローアーキテクチャーという特性が地域住民を巻き込み，新たなコミュニティの発生を促すという点で，交流の場の形成に寄与しており，オープンスペースにとどまらず，敷地外においても人々の繋がりを生んでいる．

表２　代官山ステキな街づくり協議会活動内容

| | |
|---|---|
| 活動内容 | 1．井戸端会議やまちづくりセミナーなど、住民参加型の会議<br>2．まちの調査やワークショップなど、体験型の学習会<br>3．地域のコミュニティ活動を応援する、コミュニティ支援<br>4．代官山ルール（わがまちルール）による街並みづくり |
| 主な事例 | ・旧朝倉邸が重要文化財の指定を受け、その後パブリックに開放<br>・旧山手通りと八幡通りの交差点の陸橋の廃止の決定<br>・蔦屋の開発地区にあたって旧山手通りに接する部分の樹木群の保持<br>・近くの乗泉寺地区に当初予定されていた超高層集合住宅の低層化 |

### 3-2.コミュニティを許容する機能

ヒルサイドテラスにはオープンスペースだけでなく，機能についてもバラエティがある．住居，店舗以外にギャラリー，イベントホール，図書室，あるいは集会室をもつことによって人々の出会いの機会を増やし，コミュニティ形成に寄与している．一見，他施設と相違がないように思えるが，外部空間であるオープンスペースと内部空間の機能をセットで計画を行うことは，まさに交流の場という観点で実用的である．ヒルサイドテラスに店を構えるそれぞれの店舗には内部のパブリックスペース[注3)]，もしくは外部のオープンスペースに付随しており，アクティビティが店舗内で完結することはない．（写真1）群造形におけるオープンスペースは，こういった機能面に関しても中間領域として働き，アクティビティを許容する役割を果たしている．

写真１　Ａ棟よりサンクンプラザを眺める

## 4.空間構成からみる交流の場

### 4-1.交流の場の多様性

ヒルサイドテラスにおける建物と道との間には，中間領域としてのコーナープラザ，中庭，サンクンガーデン，パッサージュなど，多様な媒介空間としてのオープンスペースが確保され，干渉空間としての歩道が交流の場として地域住民の憩いの場となっている．A棟のコーナープラザ，C棟の中庭，E棟前の広場，そしてそれらを連結するつなぎの空間は小規模な都市空間に豊かさを与えている．（図2）

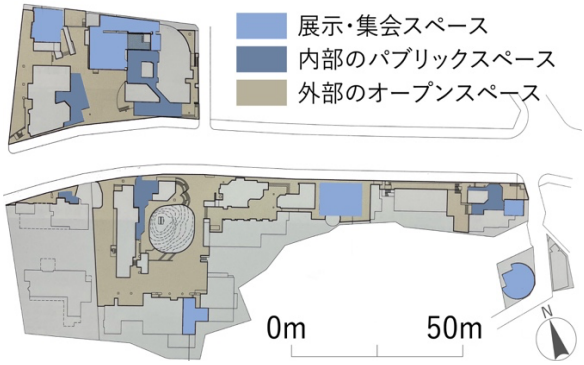


図2　交流スペースの種類

### 4-2.隅入りと回遊性

ヒルサイドテラスにおける建物入口は，基本的に隅入りとなっている．第1期のA棟にコーナープラザを設けた隅入りから，その後の棟にも計画的に隅入りが設けられている．A棟では交差点に対して隅入りが設けられ，C棟ではプラザに対して斜めに入っていく構成となるよう，隅入りを扱っている．（写真2，写真3）

回遊性に関しては，歩道から敷地内に入り，また歩道に戻る経路が多数存在しており，空間体験を非常に豊かにしている．B 棟の道沿いにつくられたペデストリアンデッキにはあまり人を取り込むことができなかったため，C 棟では街路から引き込んだ中庭をつくり，囲み型の店舗として賑わいを演出している．（図 3）

隅入りや多数の経路といった回遊性を向上させる設えは人々を敷地内へと導くきっかけとなる．また，槇は「経路に選択性があると空間が非常に豊かになり，思わぬ人との出会いが発生する」[参6)] と語っており，ヒルサイドテラスでは既存のコミュニティに加え，新たなコミュニティを醸成する施設であることがわかる．

写真２　A 棟の隅入

写真３　C 棟の隅入

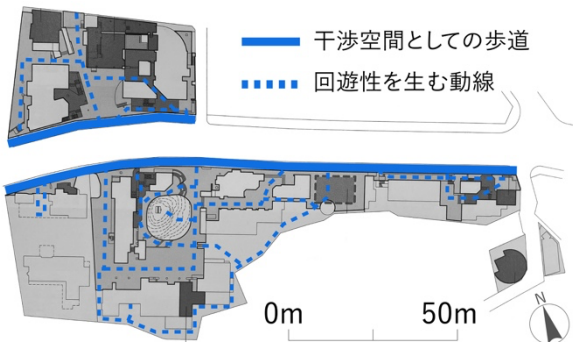


図3 回遊性のある経路

### 4-3.ヒューマンスケール

群造形をなすヒルサイドテラスでは建物を小規模に分割し，ヒューマンスケールに近づける原則がある．第1期から第3期とデンマーク大使館は第1種住居専用地域であり，10mの高さ制限と1150％の容積率に納められた集合体であった．第6期の段階で第2種住居専用地域となり，高さ制限は撤廃されたが，10mの高さに底線を通し，4階以上の建物をセットバックさせることでこれまでのヒルサイドテラスのスケール感を維持している．この線の効果で，歩道では10mの建築群と同じような高さ保ち，周辺建物に呼応した形態となっている．（図4）

これらの小規模のボリュームの集まりは，集合の中に隙間としての広場や，以下の写真4に示すような庭といったささやかなオープンスペースをもたらしている．このような小規模なオープンスペースは都市において静けさを感じることのできる空間であり，カフェ利用者や地域住民の憩いの場となっている．

写真4　A棟のサンクンプラザ

### 4-4.空間の襞と奥性

空間の襞は，地形や道，塀，樹木などによって何層にも包まれることによって形成された境界域であり，それらを横断する際に奥性が生じる．ヒルサイドテラスには，このような意味での空間の襞が多数存在している．A棟およびB棟ではコーナープラザ，エントランスロビー，ペデストリアンデッキなど，道に沿った方向に空間の襞がつくられており，C棟では中庭への

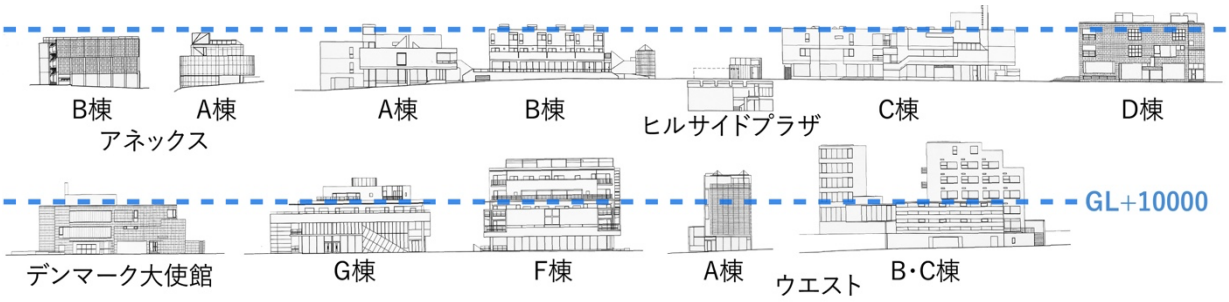


図 4 10m の高さに特徴を持つ建物立面

引き込みによって空間の襞がつくられている．G・F棟では空間の奥性と共に透明性を演出するため，道と店舗の間にエントランスホールが介在し，ギャラリー，フォーラムなどを経て広場に至る空間の襞が存在している．これらの空間の襞がパブリックスペースとして組み込まれていることにより，地上階の空間の透明性と相まって空間に奥性をもたらしている．（図5）

空間の襞と奥性は，隅入りと同様に敷地を訪れた人々に回遊性をもたらす要因となっている．しかし，このような日本的な空間構成は人々を魅了するだけでなく，空間にグラデーションを与え，交流の場に空間の多様性と奥深さを生んでいると言える．

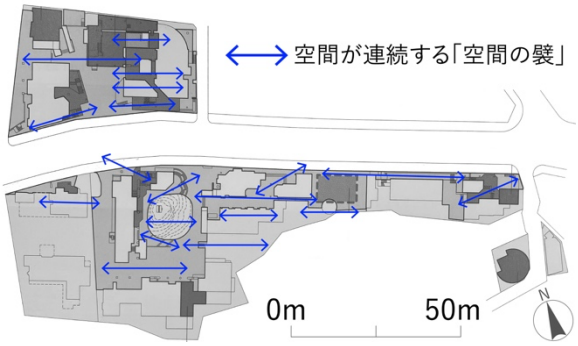


図 5 奥性を演出する空間の襞

## 5.まとめ

本稿は，槇文彦建築作品における交流の場に着目し，群造形という建築形態の交流の場としての可能性を提示することを目的としている．具体的には，群造形をなす建築の代表作として，ヒルサイドテラスを計画面の段階的開発および機能と空間構成の面の2軸から考察を行うものである．

以下，交流の場としてのヒルサイドテラスという視点で，計画面と空間構成の面からそれぞれの考察を行う．

計画面の群造形における段階的開発では，ヒルサイドテラスが約30年という長い時間をかけて開発されていく中で形成されたコミュニティの形として，「代官山ステキな街づくり協議会」があり，建物のプロセス段階におけるコミュニティの形成，またそれに伴って竣工後のヒルサイドテラスに交流の場が創出されていることがわかる．機能面の計画的特徴としては，複合施設が増加する日本において，オープンスペースと建築という複合形式をヒルサイドテラスで表現しており，内外を一体的に構成することで様々なアクティビティを許容するという空間の可能性を社会に提示している．

空間構成の面では，交流の場の多様性として，展示・集会のスペースや内部空間のパブリックスペースおよび外部空間のオープンスペースが設けられており，交流の場にバラエティがあることがわかる．また，ヒルサイドテラスにおける建物には多くの箇所で隅入りが採用されていることで，人々を建物内へと誘うエントランス配置がなされており，敷地内に回遊性をもたらしている．交流を生むためのスケールに関しては，10mという高さ制限の中でヒューマンスケールを強調したボリュームの建物を群として構築することで，周辺の街並みと呼応し，集合の中に隙間としての小規模なオープンスペースを人々に享受している．空間の襞と奥性という観点では，日本の都市空間の最大の特徴である見えたり，見えなかったりすることによって生じる空間の襞を小規模な建物によって幾重にも重なり合わせることで，空間の奥性を演出していることがわかる．このような空間構成は，ヒルサイドテラスを訪れた人々を奥へと進めさせ，偶発的な出会いをもたらすきっかけとなり，隅入りと相まって回遊性を生んでいる．

以上より，群造形をなす建築における交流の場は，地方の過疎化，地域コミュニティの希薄化を防ぎ，地域住民間の結びつきを強める場として有効であると考えられる．槇は建築と都市との関係に着目し，ヒューマンスケールの細かなディティール，空間構成によって，都市と建築，建築と人を繋ぐ建築作品を手掛けているが，中でも群造形という建築形態は，分割された小規模のボリュームと設えが回遊性をもたらす．また，バラエティに富んだ交流の場としてのオープンスペースが様々なアクティビティを許容することで，交流の場として地域コミュニティの発展に寄与すると言える．

【注】

注1）群造形は建築家・槇文彦が提唱した設計思想である．槇は「部分と全体」という半永久的な課題を三つに類型化し，ニーマイヤーや丹下健三の都市デザイン手法を相対化した．群造形は近代建築の普遍性と地域の歴史性を調停するアクチュアル（現実的）な設計思想であり，「代官山ヒルサイドテラス」などに実現された．

注2）本稿における「オープンスペース」は，建物がない場所として，広場，庭，サンクンガーデン，パッサージュなど，建物と建物を繋ぐ媒介空間となる外部空間を指す．

注3）本稿における「パブリックスペース」は，建物内部で機能が決められておらず，人々の滞留が可能な空間を指す．

【参考文献】

参1）池田怜，鳥巣茂樹，田中明：「槇文彦の建築作品における「パブリックスペース」の構成に関する研究」日本建築学会学術講演梗概集（東海）2021年9月

参2）平井淳，河田智成「槇文彦建築作品における群造形について　～慶應義塾大学の２つの図書館をめぐって～」日本建築学会中国支部研究報告集第44巻 2021年3月

参3）亀井靖子「透過空間層からみる代官山ヒルサイドテラスの空間構成～空間の奥性の可視化・数値化～」日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）2022年9月

参4）アナザーユートピア，2019年，P7

参5）アーバニズムのいま，2020年，P144

参6）ヒルサイドテラス＋ウエストの世界，P38,

参7）アーバニズムのいま，2020年，P141～P143，P145～P158，P212

参8）ヒルサイドテラス＋ウエストの世界，　P52～P97